

2019 年アートクリティック活動の報告

アートクリティック

酒井正志、玉崎紀子、服部厚子

・ 2019 年アートクリティック活動の報告

2019 年文化科学研究所アート・クリティック例会において 2019 年 1 月から 12 月までに報告された 2019 年観劇演目のリストをほぼ日付順に通し番号をつけて以下に記載する。

1 月例会：1 月 23 日(水) 12：15～

1. オペラ『フィガロの結婚』（プラハ国立歌劇場来日公演）[中京 TV・名古屋クラシック・フェスティバル] 日本特殊陶業市民会館フォレストホール 1/12(土) 17:00～ (塹江)

2. 演劇『踊れ女神イニエの涙』（レオノーラ・ミアノ作・平野暁人訳 宮城聡演出 & 上演台本 棚川寛子音楽 日本語上演・英語字幕公演）[1/14(月)祝～2/3(日)] SPAC 静岡芸術劇場（フランス公演すみ） 1/19(土) 14:00～ (伊藤)

3. MET ライブビューイング『マーニー』 ミッドランドスクエアシネマ 1/18(金)～1/24(木) 10:00～ (塹江 1/18、服部 1/22)

4. 月一歌舞伎・シネマ歌舞伎『野田版鼠小僧』 109 シネマズ四日市 (服部 1/3)

2 月例会：2 月 20 日(水) 12：15～

5. 演劇『死神』（イツ・フォリーズ ミュージカル・コメディ公演・名演 1 月例会 今村昌平原作オペラ [落語から]・水谷龍二脚本 鷗山仁演出 いずみたく音楽・藤田敏雄歌詞など）日本特殊陶業市民会館ピレッジホール 1/24(木) 13:30～ (玉崎)

6. オペラ『藤原歌劇団/日本オペラ協会東海支部発足記念～オペラの饗宴～』 御園座 1/29(水) 18:30～ (塹江)

7. オペラ『遠野物語』(こんにやく座新作初演 長田育恵作 吉川和也・萩京子・寺島隆也作曲 眞鍋卓嗣演出) 俳優座劇場 2/9(土) 14:00~ (服部)
8. オペラ『イーハトーボの劇列車』(井上ひさし作 こまつ座 長塚圭史演出) 紀伊國屋ホール 2/9(土) 18:30~ (服部)
9. 演劇『雨の夏、三十人のジュリエットが還ってきた』(清水邦夫作・西沢栄治演出 流山児祥芸術監督; 1982, 2009年の再演 冬の劇場 25 流山児 事務所公演) 座・高円寺 1 2/10(日) 14:00~ (服部)
10. 木ノ下歌舞伎『糸井版 摂州合邦辻 [セッシュウガッポウガツジ]』(菅専助・若竹笛躬作 木ノ下裕一監修・補綴・上演台本 糸井幸之助上演台本・演出・音楽 北尾巨振付) 穂の国とよはし芸術劇場 PLAT 主ホール 2/16(土) 14:30~ (服部)
11. MET ライブビューイング『椿姫』ミッドランドスクエアシネマ 2/8(金)~2/14(木) 10:00~ (服部 2/8、玉崎 2/12)
12. ナショナル・シアター・ライブ (以降 NT Live と記す)『マクベス *Macbeth*』TOHO シネマズ 名古屋ベイシティ 2/15(金)~2/21(木) 13:30~ (服部・伊藤 2/17 13:00~)
13. 映画『家へ帰ろう』(パブロ・ソラルス監督/脚本) 伏見ミリオン座 1/27(日) (服部)
14. 映画『ボヘミアン・ラブソディ』ミッドランドスクエアシネマ 1/26(土) 13:30~ (伊藤)
15. 映画『天才作家の妻 - 40年目の真実』(ビヨルン・ルンゲ監督 スエーデン・アメリカ合作 2018年公開 原作: メグ・ウォリツァーの *The Wife* (2003) グレン・クローズ、ジョナサン・ブライス主演) ミッドランドスクエアシネマ・2 2/5(火) 15:10~ (伊藤)
16. 映画『メリー・ポピンズ・リターンズ *Mary Poppins Returns*』TOHO シネマズ赤池プライム ツリー 2/12(火) 9:15~ (玉崎紫・玉崎、服部 2/10 新宿)

3月例会：3月27日(水) 12：15～

17. ミュージカル『ボーイフレンド *The Boy Friend*』(Sandy Wilson 作曲・歌詞・台本 1953 London 初演；1954 Broadway. 名古屋初演) [名古屋市文化振興事業団 2019年企画公演 寺崎秀臣 上演台本・訳詞・演出 西野淳音楽監督・指揮 早川玲美振付 セントラル愛知交響楽団] 名古屋市青少年文化センターアートピアホール 2/22(金)～2/24(日)
(玉崎 2/23 11:00&16:00、服部 2/22 18:30)
18. 演劇『レイン雨の中に』(北村想作・演出) 損保ジャパン日本興産 人形劇場ひまわりホール
2/21(日)～2/24(金) (服部 2/24 13:30～)
19. オペラ『ジークフリード』(びわ湖ホールプロデュースオペラ『ニーベルングの指輪』から 沼尻竜典指揮 ミハエル・ハンペ演出 池田香織、クリスティアン・フランツ主演) 滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール大ホール 3/2(土)～3/3(日) 14:00～
(塹江・伊藤 3/2)
20. 音から作る映画のパフォーマンス上映『サロメの娘/アクスモニウム』(檜垣智也音楽・アクスモニウム演奏 七里圭演出・映像 テキスト：新柵未成 声：青柳いづみ、sei、原マスミ、飴屋法水、他) 愛知県芸術劇場小ホール
(塹江 3/9 18:00～)
21. 演劇『父 *Le Père*』(フロリアン・ゼレール作・モリエール最優秀脚本賞 ラディスラス・ショラー演出) (橋爪功、若村麻由美、壮一帆出演) ウィンクあいち 3/9(土)～3/10(日)
(玉崎 3/10 14:00～、服部 3/9 18:30～)
22. 狂言風オペラ『フィガロの結婚』(能シテ方：赤松禎友 狂言師：茂山あきら、茂山茂、野村又三郎、山本善之 文楽：豊竹呂太夫(太夫)、桐竹勘十郎(人形)、鶴澤友之助(三味線) 演奏：クラウグアート・アンサンブル(管楽八重奏) 芸術監督：大槻文蔵(人間国宝) 脚本・演出：藤田六郎兵衛 作：片山剛(原案：小宮正安) 企画：白神克敏) 豊田市コンサートホール 3/16(土) 14:00～
(塹江)
23. 演劇『プラトーフ』(チャーホフ原作・David Hare 翻案 藤田俊太郎演出 藤原竜也主演) 東京芸術劇場 (2/1(金)～2/17(日))、大阪 梅田芸術劇場 (3/2(土)～3/24(日)) (服部 3/23)
24. オペラ『薔薇の騎士』(*Rosenkavalier*) ウィーン国立歌劇場 3/21(木) (服部)
25. ブルク劇場見学ツアー『夏の夜の夢』(独語公演 Simon Stone 演出) の dress rehearsal の見学及び舞台装置案内 ウィーン、Burgtheater (国立劇場) 3/22(金) (服部)

26. Musical 『I Am from Austria』 (独語公演) ウィーン、Raimund 劇場 3/22(金) (服部)
27. 演劇 『三婆』 (名演鑑賞会 劇団文化座 有吉佐和子作 西川信廣演出 佐々木愛・有賀ひろみ・阿部敦子出演) 日本特殊陶業市民会館ビレッジホール 3/20(木) 13:30 ~ (玉崎)
28. 邦楽セミナー 『民謡と民謡で使われるいろいろな楽器』 名古屋市芸術創造センター 2/26(火) 12:30 ~ (塹江)
29. MET ライブビューイング 『アドリアーナ・ルクブルール』 ミッドランドスクエアシネマ 2/22(金) ~ 2/28(木) 10:00 ~ (塹江・服部 2/24)
30. NT Live 『ヴァージニア・ウルフなんて怖くない *Who's Afraid of Virginia Woolf?*』 (Edward Albee 原作) TOHO シネマズ名古屋ベイシティ 3/1(金) ~ 3/7(木) 13:00 ~ (伊藤 3/4、玉崎 3/3、服部 3/2)
31. MET ライブビューイング 『カルメン』 (Richard Eyre 演出) 3/8(金) ~ 3/14(木) 10:00 ~ (塹江 3/13、伊藤 3/10)
32. 映画 『女王陛下のお気に入り *The Favorite*』 (Olivia Colman 主演 Yorgos Lanthimos 監督) 長久手イオンシネマ 3/2(土) 12:55 ~ & ミッドランドスクエアシネマ 2/22(金) (玉崎 3/2、服部 2/22)
33. 映画 『グリーンブック』 (2018 年度アカデミー賞主演男優賞ヴィゴ・モーテンセン (運転手役)、マハーシャラ・アリ助演男優賞受賞 (黒人 pianist 役) 映画館 GAGA シアター (服部 3/4)
34. 映画 『あなたはまだ帰ってこない』 (デュラス原作 『苦悩』 から) 名演小劇場 3/18(月) (伊藤)
- 4 月例会 : 4 月 24 日(水) 12 : 15 ~
35. ミュージカル 『レッド・ホット・アンド・コール *Red Hot & Cole*』 (Broadway Showcase Series : 小林香翻訳・演出 岩崎廉音楽監督 加賀谷一筆振付) 刈谷市総合文化センター アイリス大ホール 3/27(水) 18:30 ~ (玉崎)
36. シネマ歌舞伎 野田版 『桜の森の満開の下』 (野田秀樹作) ミッドランドスクエアシネマ 4/5(金) ~ 4/18(木) (伊藤 4/14、塹江 4/18、服部 4/6 109 シネマズ四日市)

37. MET ライブビューイング 『連隊の娘』 ミッドランドスクエアシネマ 4/12(金)～4/18(木) 10:00～
(服部 4/14、塹江 4/16、玉崎 4/17)
38. NT Live 『リア王 *King Lear*』 (Ian McKellen 主演 Jonathan Mamby 演出) TOHO シネマズ
名古屋ベイシティ 4/19(金)～4/25(木) (服部 4/21、伊藤 4/23、酒井 Duke of York, London)
39. 映画 『ソーキンを見た桜 (ロシアの 『ロミオとジュリエット』)』 (井上雅貴監督・田中和彦原
作 安部純子、山本陽子、ロデオン・ガリュチェンコ出演) ミッドランドスクエアシネマ
3/22(金) 12:30～ (服部 4/17)
40. 映画 『2人の女王メアリーとエリザベス *Queen Mary of Scots*』 (イギリス映画 Saoirse Ronan
主演 [Mary], Margot Robby [Elizabeth], Josie Rourke 監督 Beau Willimon 脚本) ミリオ
ン座 3/28(木) (服部)
41. 映画 『ダンボ *Dumbo*』 (ディズニー映画実写版 Tim Burton 監督) イオンシネマ東員 4/7(日)
(服部)
42. 映画 『シャザム!』 ミッドランドスクエアシネマ (塹江 4/19)
43. SPAC 創立 20 周年記念式典 (芸術総監督宮城聰氏へのフランス大使によるシュヴァリエ勲章授
与式) 静岡芸術劇場 4/18(木) 13:30～ (伊藤)
- 5 月例会 : 5 月 22 日(水) 12:15～
44. 演劇 『ふたりの女』 平成版ふたりの面妖があなたに絡む (SPAC 春の静岡国際演劇祭) 静
岡芸術劇場 舞台芸術公演・野外劇場有度 4/27(土) 18:00～ (伊藤)
45. 演劇 『メデアともう一人のわたし』 (静岡国際芸術祭、韓国版 : イム・ヒヨンテク翻案・演出
エウリピデス原作) 静岡芸術劇場 舞台芸術公園・屋内ホール「楢円堂」 4/29(月)祝 16:30～
(伊藤)
46. ダンス&サーカス 『Scala 夢幻階段』 静岡芸術劇場 4/30(火)祝 13:30～ (服部 4/30)
47. 演劇 『かもめ』 (鈴木裕美演出) 兵庫県立芸術文化センター中劇場 5/2(木) 13:00～ (服部)

48. 演劇『タイトルをつけそこなった嘘』(劇団クセック ACT) (セルバンテス、マヨルガ原作 田尻陽一翻訳・脚色・脚本 神宮寺啓演出 鈴木寛史舞台監督 榊原忠美、吉田憲司、火田詮子出演) 愛知県芸術劇場小ホール 5/1(水)~5/6(月) 5/1 (19:00~)、5/2(木), 3(金), 4(土) (14:00~)
(服部 5/3 & 4)
49. オペラ『オペラの魅力 第30回記念ガラ』(岡本茂朗主宰『オテロ』他7演目のハイライト公演) 愛知県芸術劇場コンサートホール 5/19(日) 16:00~ (塹江)
50. MET ライブビューイング『ワルキューレ』 ミッドランドスクエアシネマ 5/10(金)~5/16(木) 10:00~ (塹江 5/11、伊藤 5/13)
- 6月例会: 6月19日(水) 12:15~
51. 演劇『ハムレット』シアターコウーン (酒井 5/19 13:00~、服部 6/1 18:30~)
52. 演劇『シベリアへ! シベリアへ! シベリアへ!』(チェーホフ旅行記、書簡等に基づく) (地点公演 三浦基演出) KAAT 神奈川芸術劇場中スタジオ 6/2(日) 14:00~ (服部)
53. オペラ『リゴレット』(原語上演・日本語字幕付) (ポローニャ歌劇場管弦楽団・合唱団) 愛知県芸術劇場大ホール 6/15(土) 17:00~ (塹江・酒井)
54. NT Live『英国万歳!』(*The Madness of George III* Alan Bennett 作 Mark Gatiss, Adrian Scarborough 主演 Adam Penford 演出 Nottingham Playhouse で収録) TOHO シネマズ名古屋ベイシティ 5/31(金)~6/6(木) 12:05~ (伊藤 6/4、玉崎 6/2、服部 6/5)
55. MET ライブビューイング『カルメル会修道女の対話』 ミッドランドスクエアシネマ 6/7(金)~6/13(木) 10:00~ (塹江・玉崎 6/12)
56. 松竹 Broadway Cinema ライブビューイング『シー・ラヴズ・ミー *She Loves Me*』(Broadway 舞台収録 [2016.7/1] の上映・Tony 賞受賞作) ミッドランドスクエアシネマ 5/24(金)~30(木) 18:30~ (玉崎 5/29、服部 5/30)
57. 映画『コレット *Colette*』(英 [BFI] 米合作 Keira Knightley 主演) 新宿武蔵野館 6/2(日) (服部)

58. 日本演劇学会 6/1(土)~6/2(日) 成城大学 報告 講演：三島景太 (SPAC 俳優) による「鈴木忠志 [水戸芸術館] から宮城聡 [SPAC] へ」 (服部 6/1)

7月例会：7月24日(水) 12:15~

59. ミュージカル『ピピン *Pippin*』(城田優主演) 愛知県芸術劇場大ホール 7/6(土) 17:00・7/7(日) 13:00~ (服部 7/6 17:00~)

60. ミュージカル『オン・ザ・タウン *On the Town*』(佐渡裕プロデュース・オペラ イギリス人俳優陣による英語上演 日本語字幕) 兵庫県立芸術文化センター大ホール 7/12(金)~7/21(日) 14:00~ (服部 7/14、玉崎 7/13)

61. 御洒落名匠狂言会『釣狐』(名古屋演劇鑑賞会) 名古屋能楽堂 7/16(火)、狂言講座(佐藤融講師) & 実演 名演小劇場 2F 7/16(火) (塹江)

62. NT Live『アントニーとクレオパトラ *Antony and Cleopatra*』(Ralph Fiennes, Sophie Okonedo 主演 Simon Godwin 演出 2018.9/18-19.1/19 Olivier 上演) TOHO シネマズ名古屋ベイシティ 6/21(金)~6/27(木) 13:15~17:00 (伊藤 6/24、玉崎 6/23、服部 6/27)

63. シネマ歌舞伎『鷺娘』(2006年収録、玉三郎)『日高川入相花王』ミッドランドスクエアシネマ 7/3(水) 11:15~12:25 (塹江)

64. NT Live『アレルヤ! *Alleluja!*』TOHO シネマズ名古屋ベイシティ 7/12(金)~7/18(木) 12:35~ (伊藤 7/16、服部・玉崎 7/17)

65. 講談・歴談・講演『後藤新平(青春篇)と衛生のみち』大須演芸場 6/22(土) 17:00~ (伊藤)

66. 講演会&実演『バリ人の舞踊と人生哲学』(講演会：バリの若者が躍ることと、そこに込められた価値観、実演：バリの集団舞踊「ジャングル」「ケチャ」)(講師：Prilyasinta, Ni Wayan 氏 & Purnawan, I Kadek 氏) 南山大学アジア・太平洋研究センター主催 外国語学部アジア学科共催 ワークショップ 南山大学 R 棟 6階 R63 教室 7/4(木) 13:30~15:00 (塹江)

67. 映画『アラジン *Alladin*』(実写版; Musical 舞台の映画化) TOHO シネマズ赤池プライムツリー 7/28(日) 15:40~ (玉崎・玉崎紫)

9月例会：9月11日(水) 12:15～ (8月は夏休みで休会)

68. オペラ 『トゥーランドット』 びわ湖ホール大ホール 7/27(日) 14:00～16:40 (塹江・伊藤)
69. 能 『第18回名古屋名駅 薪能』 JR名古屋駅・タワーズガーデン特設会場 7/28(日) 18:00～20:00 (塹江)
70. 演劇 『裏長屋騒動記』 (名演例会・前進座 山田洋次監修・脚本 小野文隆演出) 日本特殊陶業市民会館ビレッジホール 8/1(木) 18:30～ (玉崎)
71. 演劇 『じゃじゃ馬ならし』 (こどものためのシェイクスピア 山崎清介演出) びわ湖ホール中ホール 8/3(土) 14:00～ (服部)
72. セミナー 『沼尻竜典によるオペラ指揮者セミナー』 びわ湖ホール大ホール 8/5(月)・8/6(火) 13:00～17:00 8/7(水) 11:00～17:00 (塹江)
73. 演劇 『ブラッケンムーア *Bracken Moor*』 (アレクシ・ケイ・キャンベル作 Alexi Kaye Campbell、岡田将生、木村多江主演 上村聡史演出 日本初演 / Tricycle, London 2013 初演) 日本特殊陶業市民会館 8/8(木) 18:15～ (服部)
74. 楽劇 『神々の黄昏』 (三澤洋史指揮・愛知祝祭管弦楽団 コンサートオペラ) 愛知県芸術劇場コンサートホール 8/18(日) 14:30～ (塹江・服部)
75. 演劇 『神の子供たちは皆踊る』 (*After the Quake* [脚本原題] 村上春樹原作、フランク・ギャラティ脚本、倉持裕演出) 東海市芸術劇場大ホール 8/22(木) 13:00～ (服部)
76. 演劇 『フローズンピーチ』 (KERACROSS ケラリーノ・サンドロビッチ作 [第43回岸田國土戯曲賞受賞]・鈴木裕美演出) 日本特殊陶業市民会館ビレッジホール 8/23(金) 18:30～ (服部)
77. 演劇 『三人姉妹』 (チェーホフ原作・三浦基脚本・演出 地点京都公演) 京都芸術センター講堂 8/25(日) 15:00～ (服部 8/25)
78. 演劇 『赦し』 (戦争を語り継ぐ演劇公演第6弾 企画・構成・脚本・演出：伊藤敬) 名古屋市東文化小劇場 8/22(木)～8/25(日) (玉崎 8/24 11:00～)

79. 長良川の薪能『清経』長良川河畔の予定 8/30(金)
(塹江 (雨天のため、岐阜市民会館に移して公演))
80. NT Live『リチャード2世 *Richard II*』TOHO シネマズ名古屋ベイシティ 9/6(金)~9/12(木)
12:40~ (伊藤 9/10、服部 9/6)
- 10月例会：10月30日(水) 12:15~
81. オペラ『ファウスト』(英国ロイヤルオペラ来日公演・アントニオ・パッパーノ指揮・ディヴィッド・マクヴィカー演出 ヴィットリオ・グリゴロ、イルデブランド・ダルカンジェロ、レイチェル・ウィリス=ソレンセン出演) 東京文化会館大ホール 9/15(日) 15:00~ (塹江)
82. オペラ『オテロ』(ロイヤルオペラ来日公演 アントニオ・パッパーノ指揮 キース・ウォーナー演出 グレゴリー・クンデ、フラチュヒ・バセンツ、ジェラルド・フィンリー出演) 神奈川県民ホール 9/16(月)祝 15:00~ (塹江)
83. 演劇『野の花ものがたり』(劇団民藝名演例会 原作徳永進「野の花通信」) 日本特殊陶業市民会館ピレッジホール 9/20(金) 13:30~ (玉崎)
84. 能 小牧山薪能『鶴亀・腰祈・羽衣和合之舞』小牧山史跡公園 9/21(土) 18:00~20:00 (塹江)
85. 演劇『リーグ・オブ・ユース 青年同盟』(雷ストレンジャーズ企画・小山ゆうな演出 イブセン原作 小山ゆうな・弦巻星之介上演台本) 下北沢シアター711 9/15(土) 16:00~ (服部)
86. 演劇 PARCO プロデュース『人形の家 PART 2』(イブセン原作・ルーカス・ナス脚本 常田景子翻訳 栗山民也演出 永作博美主演) 穂の国とよはし芸術劇場 PLAT 主ホール 9/23(月)祝 13:00~ (服部・伊藤)
87. コンサート『鬼太鼓座コンサート』(名古屋市文化振興事業団主催) 名古屋市青少年文化センター アートピアホール 9/25(水) 18:30~ (塹江)
88. オペラ『サルタン王物語』(演奏会形式 愛知ロシア音楽研究会主宰) 愛知県芸術劇場コンサートホール 9/28(土) 17:30~ (服部・塹江)

89. 人形浄瑠璃・文楽『生写朝顔話』(昼の部)、『ひらかな盛衰記&日高川入相花王』(夜の部) 名古屋
 屋市芸創センター 10/4(金) 14:00 ~ 夜公演 18:30 ~
 (塹江 (昼夜)、伊藤 (夜の部)、玉崎 (昼の部))
90. オペラ『ホフマン物語』(名古屋二期会 2019 公演 園田隆一郎指揮・中村敬一演出 中井亮一・
 佐波真奈巳主演) 愛知県芸術劇場大ホール 10/5(土) 18:00 ~、10/6(日) 13:00 ~
 (塹江・玉崎 10/6)
91. コンサート ヘンデル作曲『メサイア』(レザール・フロリサン公演) 愛知県芸術劇場コンサー
 トホール 10/13(日) 14:00 ~ (玉崎)
92. 歌舞伎・吉例顔見世 50 回記念『碁太平記白石嘶&身代わり座禅&臉の母』(夜公演) 御園座
 10/21(土) 16:30 ~ 21:00 (塹江)
93. オペラ『椿姫』(トリエステ・ヴェルディ歌劇場公演 セミオン・ビシュコフ指揮 デジレ・ラ
 ンカトーレ主演) 愛知県芸術劇場大ホール 10/25(金) 18:30 ~ (塹江・酒井)
94. 松竹 Broadway Cinema・ライブビューイング『王様と私 *The King and I*』(ロンドン舞台版
 Kelli O'Hara & 渡辺謙主演 Bartlett Sher 演出 London Palladium 収録) TOHO シネマズ名古屋
 ベイシティ 9/27(金)~10/10(木)、TOHO シネマズ赤池プライムツリー 10/25(金)~10/31(木)
 (玉崎 10/2 9:20 ~、10/26 14:30 ~)
95. 松竹 Broadway Cinema『42nd ストリート *42nd Street*』(Theatre Royal Drury Lane [劇場]
 2017 収録 Mark Bramble 演出 Bonnie Langford [Dorothy], Clare Halse [Peggy], Tom Lister
 [Marsh] 主演 March 2017 ~ Jan. 2019) ミッドランドスクエアシネマ 10/24(木)~10/31(木)
 (服部 10/27 19:30 ~)
96. NT Live『みんな我が子 *All My Sons*』(Jeremy Herrin 演出 Sally Field, Bill Pullman 主演
 Old Vic, 5/14, 2019 収録) TOHO シネマズ名古屋ベイシティ 10/4(金)~10/10(木) 12:40 ~
 (伊藤・酒井 10/6、服部 10/5)
97. 映画『蜜蜂と遠雷』(石川慶監督・脚本・編集 恩田陸原作) TOHO シネマズ赤池プライムツリー
 10/4(金)~ (玉崎・紫 10/10(水) 15:30 ~)

98. 映画『真実』(第76回ヴェネツィア国際映画祭 opening 作品 是枝裕和監督カトリーヌ・ドヌーブ & ジュリエット・ピノシュ主演) 109 シネマズ四日市 10/14(月) (服部)

99. 映画『英雄は嘘がお好き』(仏・ベルギー合作 ローラン・ティラール監督 ジャン・デュジャールダン主演 2018) ミッドランドスクエアシネマ 10/19(土) (服部)

11月例会: 11月27日(水) 12:15~

100. 演劇『ハムレット・マシーン』(text: ハイナー・ミュラー 谷川道子翻訳 三浦基演出 安部聡子・石田大・小河原康二出演 地点公演) 京都 Theatre Eq Kyoto 10/31(木) 17:00~ (服部)

101. オペラ『カルメン』(愛知県芸術劇場・神奈川県民ホール・札幌文化芸術劇場グランドオペラ共同制作 フランス語上演新制作・日本語及び英語字幕 ジャン・レイサム=ケーニック指揮・田尾下哲演出 [11/2 cast] 加藤のぞみ、福井敬、今井俊輔、高橋絵理 [11/3 cast] アグンダ・クラエワ、城宏憲、与那城敬、嘉目真木子) 愛知県芸術劇場大ホール 11/2(土)・11/3(日) 14:00~ (塹江 11/2、玉崎 11/3)

102. 演劇『高丘親王航海記』(澁澤龍彦原作 ITO プロジェクト 糸あやつり人形芝居 少年王者館天野天街脚本・演出) 愛知県芸術劇場小ホール 11/2(土)~11/3(日) (服部 11/3 14:00~)

103. 演劇『パパ、I Love You』(レイ・クーニ 作 加藤健一演出・主演 名演例会) 日本特殊陶業市民会館ピレッジホール 11/13(水) 13:30~

104. 演劇『虹のかけら もう一つのジュディ』(三谷幸喜作・構成・演出 戸田恵子主演 萩野清子音楽監督) 長久手文化の家森のホール 11/24(土) 14:00~ (玉崎)

105. NT Live 『イブの総て *All about Eve*』(Ivo Van Hove 演出 Joseph L. Mankiewicz 原作 (1950 film) Gillian Anderson & Lily James 主演) TOHO シネマズ名古屋ベイシティ 11/8(金)~11/14(木) 12:45~ (伊藤・服部 11/10、玉崎 11/9)

106. MET ライブビューイング『トゥーランドット』(ヤニック・ネゼ=セガン指揮 フランコ・ゼフィレリ演出 クリスティン・ガーキー、ユシフ・エイヴァゾフ主演 10/12, 2019 収録) ミッドランドスクエアシネマ 11/15(金)~11/21(木) 11:00~ (塹江 11/16)

107. 映画『ゴッホとヘレーネの森-クレラーミュラー美術館の至宝』名演小劇場 11/12(水) 12:25~ (伊藤)

12月例会：12月19日(水) 12：15～

108. 『RITA & RICO (リタとリコ) ～「セツアンの善人」より～』(プレヒト作・構成 渡辺敬彦
演出・台本) SPAC 静岡芸術劇場 12/15(日) 14:00～ (服部)

109. 演劇 『叔母との旅 *Travels with my Aunt*』(名古屋芝居の広場第3弾 Graham Greene 原作
Giles Havergal 脚本 安西徹雄訳 斉藤敏明演出 佃典彦・末吉康治・岡田一彦・西尾武出演
中岡辰仁演奏) 名古屋市千種文化小劇場 12/5(木)～12/8(日)
(玉崎 12/7 14:00、服部 12/7 18:30)

110. オペラ 『いつわりの女庭師』(愛知県立芸術大学オペラ・イタリア語上演 佐藤正浩指揮 飯塚
勲生演出 モーツァルトの初期作品) 長久手文化の家森のホール 12/7(土)～12/8(日) 14:00～
(塹江・服部 12/7)

111. コンサート 『聖夜のトランペット』(アダム：ラッパ [tr.]、ヴィタリ・スタヒエビチ [p])
日進市民会館大ホール 12/13(金) 18:30～ (玉崎)

112. 演劇 『ドクター・ホフマンのサナトリウム～カフカ第4の長編～』(ケラリーノ・サンドロヴィッ
チ作・演出) 穂の国とよはし芸術劇場主ホール 12/21(土) 13:00～ (服部・伊藤)

113. オペラ 『アマールと夜の訪問者』(ワンコインオペラ) (公財) 四日市文化まちづくり財団 四
日市市文化会館第1ホール 12/27(金)～28(土) (服部 12/28 14:00～)

114. MET ライブビューイング 『マノン』(マスネ作曲 2019/10/23 収録・マウリツィオ・ベニー
ニ指揮、ロラン・ペリー演出、リセット・オロペーサ、マイケル・ファビアーノ出演) ミッドラン
ドスクエアシネマ 11/29(金)～12/5(木) 11:00～ (塹江 12/3、服部 11/30)

・観劇短評選

(1) 10. 木ノ下歌舞伎『糸井版 摂州合邦辻』

木ノ下歌舞伎『糸井版 摂州合邦辻』をPLAT（穂の国とよはし芸術劇場）で観た。木ノ下歌舞伎は、主宰の木ノ下裕一が歌舞伎演目上演の現代的な可能性を模索して補綴・完成した脚本を演出家に委ねて上演するというスタイルを取ってきている。『心中天の網島 2017 リクリエーション版』（三重県文化会館）では、過去と現代が交錯する心中物語を抜き差しならぬ人間模様と難波の数々の橋を表象する網目状の舞台装置、歌舞伎の口跡と現代劇、歌謡曲もどきの歌で描き出した。心奪われる面白さであった。今回も前作と同様、糸井幸之介演出で、伊東沙保、武谷公雄、西田夏奈子らが出演し、4月に亡くなった島次郎と、角浜有香が舞台美術を担当した。期待は裏切られなかった。

「レパトリーの創造」と銘打たれた今作の企画制作はロームシアター京都と木ノ下歌舞伎であり、共同制作としてPLATとKAAT（神奈川芸術劇場）が名を連ねる。そして公演に先立ち「スピンオフ！プログラム『古典精読講座』」等セミナーを各地で開催しその成果を収録したブックレットを発行・販売しているが、これが読み応えがある。上演を観て単に楽しむだけでなく、古典作品の読み直し・語り直しのプロセスを観客も体験することで古典世界の新たな広がり気づく契機を提供しているのである。

能「弱法師」や説教節「しんとく丸」に基づいて語り継がれた浄瑠璃・歌舞伎の『摂州合邦辻』は、継母玉手姫に恋慕された義理の息子俊徳が業病を患い盲いて出奔し、身をやつす設定である。俊徳を追って父合邦の庵にたどり着いた玉手が、父に道ならぬ恋をとがめられて刺されたその時唐突に、恋は見せかけであり、お家騒動を納めるための方便、その血を俊徳に飲ませれば病は治ると語って息絶える。言われたとおりに行なえば、はたして俊徳の顔も目もみるみる元通りの状態になるという、荒唐無稽の話である。

今回の舞台では、玉手姫が合邦に刺されるシーンから始まったが、すぐに身をやつした俊徳が現在の天王寺辺りのすすけた都会の片隅で生きている情景を歌ったコーラスに替わった。時空を超えた普遍的なテーマを扱うこの物語は、話の途中から語りだされており、一種の叙事詩となっている。コーラスの合間には何度も冒頭の殺しの場面がフラッシュバックのように挿入され、劇世界が現代にまでつながっていることを意識させられた。装置はシンプルで、役者たちが木の柱のような角材数本をスピーディに動かして組み合わせて場面転換を行い、抽象的な舞台空間を生み出していた。角材が倒れてこないかと心配になったのは、劇世界に没入することを絶えず妨げられていたためかもしれない。

俊徳は17歳の高校生が演じた。演技と歌に未熟さを感じたが、俊徳は無垢なキャラクターであることが重要で、リアルな演技は必要はない。玉手を演じた内田滋は、道ならぬ恋を迫る妖艶な女、妬み深い継母、「パパっ子」という間延びした歌を歌って父合邦と戯れる無垢な娘、家を守る覚悟の妻、血を飲ませて病を癒やすグロテスクな聖女とそれぞれ不連続な役柄を演じ分けた。

合邦の庵室の場は見応えがあった。高安家へ奉公に出た自慢の娘が、義理の息子に色目を使い、嫁ぎ先を飛び出したことに対する親の戸惑いと、親に甘えたいと思いつつも、自分を殺させるために、

悪ぶって見せる玉手。そして、合邦に刺し殺される恍惚の中、極悪非道の振る舞いは本心を隠すためであったと真実を吐露する件で、それまでに集積されてきた悪女のイメージが一瞬にして崩れる。変身はあまりにも突然である。しかしリアリティを宙吊りにする糸井の「妙-ジカル」の手法や、西田のヴァイオリンによる情熱的な下座音楽と義太夫風の語り、特に、合邦の「でかしゃった、でかしゃった」という口跡には理性での理解をはねつけ虚構をそのまま受け入れさせる強さがあった。

玉手の元々の名は「辻」であるが、辻は様々な人々が行き交う空間である。この舞台は「しんとく丸」でも「玉手姫」でもなく「糸井版摂州合邦辻」と名付けられている。親子の情を蘇らせたその空間において、聖と俗、生と死、貴と賤、民と公、現代と中世が往来し交差するのである。最終場で、役者たちは舞台上で数珠を連想させる人の輪を作り、弔いを唱えながらその中で大きな木の玉を転がした。聖なるものが舞台空間に充ちるように感じられ、深い感動を覚えた。

(2) 48. クセック『タイトルをつけそこなった嘘』

セルバンテス没後 400 周年記念、クセック公演『タイトルをつけそこなった嘘』を観た。しかし、このタイトルの戯曲作品があるわけではない。「嘘」をテーマにした 3 つの小品、21 世紀のスペイン演劇の作家ファン・マヨルガ作『善き隣人』、17 世紀のミゲル・デ・セルバンテス作『偽りの結婚』、『サラマンカの洞窟』が休憩を挟まずつなげて上演されたのである。舞台上には赤い敷物が敷かれその上横一列に 13 個の白い洋式便器（というオブジェ）が並べてあった。

役者たちの低い姿勢と静止画をコマ送りにしているような動き、囁いた独特の発声とリズム、群読、白と黒、赤を基調にした衣装と装置、様式を持ったクセックの舞台は美しく、上演に立ち会うだけで観劇した喜びを感じる。例年は生を一瞬间に切り取った美しさや衝撃の強さに、筋がわかりにくくても満足していたが、今年は、3 作品の「嘘」の積み重ねのなせる力技か、騙りと真実の反転に底なしの恐ろしさ/可笑しさと快感を覚えた。

『善き隣人』は、毎朝挨拶を交わす背の低い女が隣人の背の高い男とカフェで同席し、にこやかに話しかけながら、外見や物腰から「外国人でしょう？」と執拗に迫り恫喝する会話劇である。耐えきれなくなって逃げ出そうとする男に、女は「居住許可証がない人だ。」「警察を呼びますか？」「卑屈になることはありません。」「あなたの心の広さを試そうとしていますのです。」などと冷静に語り、便器から取り出したワインで乾杯しようとする。女の正体も意図も全く不明のまま、怖々と男はワインを飲むしかなく、観客は、現代の日本社会にも起こり得る話として遠巻きに見守るしかない。「善き」という言葉に皮肉と悪意を連想し、どちらが嘘をついているのか、何が善なのかと考えていたら、暗闇から数人の男女が登場し次の芝居が始まっていた。

『偽りの結婚』は『模範小説集』に収録されている対話形式の小説で、憔悴しきった少尉が学士に、財産家の女性と出会って結婚したが実は女は財産家の使用人だったと語る身の上話から成り立っている。脚色・脚本を手がけた田尻陽一は「どんなことが身に降りかかったのか少尉が話す一人称の語りの中に登場する人物を舞台上に現前化させなければいけないこと」に苦労したと述べている。はたして舞台脇に物語の語り手且つ少尉役の 2 人と聞き手の学士役の計 3 人が立ち、エピソードが劇中劇で

演じられた。語り手役と演じ手役が分かれているわけではなく、劇中劇と語りの境界が曖昧な状態で、聞き手がしばしば言葉を差し挟んで進行するスタイルは、観客に物語世界の真偽の判断をさせない。女に騙されて結婚し立派な金鎖も住む場所も失った少尉の話に学士が同情すると、少尉は実は金鎖は精巧に出来た偽物だったと打ち明ける。騙す/騙される側が反転するのである。しかし驚くべきことに、少尉は最終的に金鎖が偽物であったからではなく、彼の恋心が本物で盗まなかったから幸せであったというのだ。語り手がエピソードを締めくくって嘘が真実に反転し、観客もまた劇という虚構に騙されて幸せを感じた。

最後に『サラマンカの洞窟』が演じられた。良人が遠方に出かけた際、「貞淑な」妻は一夜の宿を乞うたサラマンカからの学生に、この家で見たことは何も語らないと約束させ泊めることにした。その夜かねてより村の男たちと宴会をして遊ぶ計画であったからである。ところが良人は事故に遭遇し突然帰宅する。万事休すというとき件の学生がサラマンカで習得した魔術をお目にかけますと、村人そっくりな男たち（実は本人たち）にごちそうを持って来させ、宴席を張ったのである。良人は目を丸くしながらも、すべてを承知して「ではいただきます」と都合良く大人の対応をした。他の役者も加わり13人による晩餐会が始まったところで、舞台背面の黒い幕が落ち、劇空間を映し出す歪みのある鏡面が現れた。芝居の終わりに歪んだ「最後の晩餐」が映し出されたのである。

アフタートークでは「嘘をつかなければ人は生きていけない」と繰り返し語られた。『サラマンカの洞窟』で良人が魔術という嘘を受け入れなければ、大惨事が起こったことだろう。弱い者が身を守るための嘘、人間関係の円滑油としての嘘がある一方で権力者の語る嘘、人を陥れる嘘がある。芝居や小説も言わば嘘である。人間は嘘をついたり見破ったりすることに知恵を働かせて生きてきたが「ポスト真実」といわれる現在改めて嘘の功罪と演劇の力に思いを巡らすことができた。

また、最終場の鏡は予算の都合で一枚の鏡が用意できず結果として劇場空間をクリアーに映し出すことが出来なかったと説明があった。客席のあちこちから「この方がいい」「歪んでいる方がいい」という声が上がった。筆者も最後に世界の歪みを映しだしたいという演出家の意図と考えていたため騙されたと思ったが、この理由も嘘かもしれない。5月4日の公演は、長く名古屋で活躍したクセツクの看板女優の火田詮子さんの最後の舞台となった。これは残念ながら嘘ではない。ご冥福をお祈りしたい。

(3) 85. 『リーグ・オブ・ユース～青年同盟～』

雷ストレンジャーズによる、演劇ジェット紀行ノルウェー再訪編、ヘンリック・イブセン作小山ゆうな演出『リーグ・オブ・ユース～青年同盟～』のレビュー公演を下北沢の711劇場で見た。

711劇場は狭い階段を上ったところにある舞台の広さが間口4800mm奥行き2700mmの小さな劇場で、客席数は60から70位だろう。客席に入るとすぐに、舞台両袖に人の顔の描かれた紙がびっしりと貼られ、舞台前面には小さめの紙製お面の付いたペットボトルがずらりと並べてあるのに気がついた。開演前の演出家による短いレクチャーでは、イブセンの初期に創作されたこの戯曲は後の作品『民衆の敵』などに発展するモチーフや登場人物が見られること、美術担当の兼乗雅寛のアイデアで

民衆を表すために役者らが絵を描いてお面を作ったことなどが紹介された。翻訳・台本を担当した小山ゆうなと弦巻星之介により30人からなる登場人物の数は絞り込まれ、状況を説明する語り手役の登場、仮面と早変わりの使用により、長い作品がわずか8人でスピーディに演じられる1幕ものに仕上げられていた。

客席の照明が落ちるとそれまで客席の案内係に見えた男性がペットボトルの列をまたいで舞台に立ち、場面設定のト書きを語り始めた。この前口上の後、若い役者たちが登場し言葉を発せずに仮面を顔に当て、ペットボトルを持ち換え軽快な音楽に合わせて踊った。このパフォーマンスは祝祭即ち芝居の始まりを告げると同時に、芝居で展開されていくアイデンティティの揺らぎと混乱及びその帰結を表す默劇のようでもあった。観客は舞台上の出来事の展開を追いながら、虚構性と現前する役者の身体性を絶えず意識させられることになる。

物語は南ノルウェーの保守的な町の鉄工場主ブラッツベルグ家と地主モンセン夫人の対立を背景にして展開する。権力志向の強い新参の見習い弁護士ステンスゴールは独立記念日に工場主を批判する演説を行い若者の賛同を得て青年同盟を結成するが、工場主は彼の演説をモンセン夫人批判として誤解して喜び彼の存在を認めてしまう。彼は結婚を立身出世の一手段として、両家の娘たちや未亡人にまで無節操に求婚を試みる人物である。その求婚騒動の最中に信用社会を根底から揺るがし、身の破滅を招きかねない偽署名手形が発行され流通する。ステンスゴールはその偽手形を手に入れると、工場主とその娘との婚約を絡ませて交渉を始める。誤解や結婚相手の取り違え、ラブレターの誤配といった古典的な手段によってもつれたプロットとドタバタは、その開示によって一気に解決し、ステンスゴールを除いた3組の結婚が成立する。彼は体制から閉め出されるトリックスターなのである。この帰結を招いたのは民衆を扇動した新聞にあるとして人々が顔の描かれた紙をばらまき、舞台が散らかったところで芝居は終わりとなる。

狭い劇場のなかで役者たちは観客に向かって演説を試み、企みを語り、客と客席を情景に見立てた。観客もまた劇世界に取り込まれ悪ふざけの共犯者にも傍観者にもなったのである。批判の対象は当時のノルウェー社会の資本・権力体制やその中で漫然と生きている人々である。これらは現代の日本社会にも通じる内容であるが、物語の仕掛けは中世の道德劇や近代初期の悪役やベテン師が活躍する悪漢文学、またイタリア喜劇に近い。舞台では偽善者たちに民衆を攪乱させながらも、結局は旧体制が維持され存続するさまが巧みな演出によって再現された。この戯曲はイブセン唯一の喜劇といわれているが、社会に対する問題提起を行なっている点においても『人形の家』等他の作品への橋渡しをしていると考えられる。

「マイナーな戯曲であり、有名な俳優が出ているわけでもないのにチケットがなかなか売れない」と終演後に演出の小山は語った。しかし、ベテランの役者たちの演技はこなれて質が高く、芝居としても大いに楽しめた。日本の演劇界がスター主義に走らざるをえない状況を残念に思いながらも、良いものを観た満足感で劇場を後にした。

(服部 記)

(4) 56. 『シー・ラヴズ・ミー』 (*She Loves Me*) Broadway Cinema 観劇

5/29 (火) にミッドランドスクエアシネマで松竹ブロードウェイシネマが配給する『シー・ラヴズ・ミー』 (*She Loves Me*, Broadway, 2016) を観た^[1]。これは、名古屋の映画館では Broadway Musical 舞台の初の上映となった。この初の Musical ライブビューイングを機に、ここに短評を記すことにした。

このミュージカル *She Loves Me* は、Miklós László 原作の戯曲『香水店』 (*Perfumerie*, 1937 年ブダペスト初演) に基づいており、アメリカで3度も映画化されている。名匠ルビッチ監督 (Ernst Lubitch) の手になる最初の映画化、*The Shop around the Corner* (1940 邦題『街角』) は romantic comedy の古典的名作である。後の2作 *In the Good Old Summertime* (1949) と *You've Got Mail* (1998) も恋愛喜劇だが、背景はアメリカに、時代も変わっている。今回の Musical 舞台は、原作通り戦前のブダペストが背景で人物名もハンガリー語で、昔懐かしい世界を現出し、ファンを喜ばせる。この *She Loves Me* を制作した上演母体 Roundabout Theatre Company は Broadway に3劇場も持ち、教育を柱として名作演劇や Musical を再演し、Tony 賞候補作や受賞作を輩出している民間の非営利団体 (創立 1965) である。

ミュージカル *She Loves Me* の初演は 1963 年で、Jerry Bock 作曲、Sheldon Harnick 作詞、Joe Masteroff 脚本、Harold Prince 演出、Carol Haney 振付、Barbara Cook と Daniel Massey 主演という伝説的才能を揃える公演だが、不運にも派手な大作 *Hello, Dolly!* の初演と同時で、Tony 賞の受賞を逃した。しかも、翌年同じ Bock & Harnick のコンビによる『屋根の上のバイオリン弾き』の大成功が、この小品の影を薄くした。今回またもや新特大作 *Hamilton* と同時で Tony 賞をほぼ独占されたものの、この *She Loves Me* は批評家の絶賛を浴び、演劇各賞で最多の候補指名を受け小品として大成功であった。

過去の公演批評から見ると、Roundabout 劇団主宰の 1993 年再演舞台が今回の基だと言える。1993 年舞台は、演出は Scott Ellis (劇団副芸術監督) で、振付は後に Kander & Ebb 作舞台と映画『シカゴ』 (2002) のダンス振付で有名になる当時若い Rob Marshall が担い、ダンスが少なく地味と言われた初演版を Broadway らしい staging で show up した。その結果この作品の最長公演 352 公演となり、演出・振付が同じロンドン版も1年の長期公演で 1994 年 Olivier 賞 Musical 再演賞を受賞した。そこで今回の Studio 54 (Roundabout 劇団の本拠地 1006 席) での再々演でも、Scott Ellis が3度目の演出に、振付は新たに Tony 賞振付賞連覇の Warren Carlyle を配した。*Oklahoma!* (1998) のロンドン再演の演出助手を機に Broadway に渡り活躍している Carlyle は、NY City Center の *Encores!* シリーズで名作 Musical を 2007 年以来毎年毎年の如く振付している。

まず、開幕前哀愁に満ちたバイオリンの音が甘美に響き、ハンガリーの雰囲気醸し出す。舞台が開くとブダペストの街角に立つ香水店が現れる。Tony 賞装置賞受賞の David Rockwell デザインの宝石箱のように美しいと評判の装置である。店の丸みをおびた薄緑の屋根から、床と同じシックな薄青色の舗道の幾何学模様までもアールヌーヴォーで、欧州一美しいと言われた戦前のブダペストを象徴する。

ドラマは喜劇の典型通り朝始まり、この角の店の前に店員たちが次々現れ、開店を待つ。店員たちの朝の挨拶と会話は、Bock & Harnick 独特の歌とセリフが混じり合う曲である。社長が来て店の鍵を開けると、ほんの1瞬で折り紙を開いたように、店の内部が現れる。ステンドグラスの窓とショーケースの色とりどりの化粧品の瓶がきらめく。壁面は流線形の花模様で飾られ、2階への螺旋階段も優美である。洗練された美しい装置は、素早く回転して正面玄関から店内へ、またロッカー室へ、作業室へ、螺旋階段に、そして2階に瞬時に変わり、それがロマンチックな恋の喜劇の背景となる。

主筋の恋物語は、ローマ新喜劇以来の恋人の正体を知らないという喜劇である。香水店の同僚として働く幹部店員 Georg (ジョージ)^[2] と新入店員 Amalia (アマリア) は、出会った途端から衝突し、真面目だが高慢な上司と気まぐれで生意気な新人ゆえ口喧嘩や、いざこざが絶えない。実は二人は、Dear Friend としか知らない匿名の文通相手に心を打ち明け、この相手が仲の悪い同僚とは知らぬまま、文通相手に共感し恋している。この恋人の正体の謎と会ったこともない相手への恋心が、誤解とコメディを生み出し、観客を楽しませる。1930年代、貴族的オペレッタを離れ市民階級の哀歓を描く musical comedy が趨勢になった。この作品はこの30年代初期を背景にして、普通の若者の仕事場での恋が描かれる。まず、文通相手への恋心をそれぞれ店の同僚にうち明ける場面が秀逸だ。ジョージ (Zachary Levi) が同僚のシボ (Sipos) に夢中になって手紙を読み聞かせるが、中年のシボ (Tom McGrath) は商品包装をしつつ主役の脇の道化を演じる。最近社長と折り合いの悪い友を心配し、失職してはいけないよと諭す。いよいよ、カフェで会う約束の朝にジョージは “Tonight at Eight”^[3] の歌を、高まる興奮に飛び上がりながら “More and more I'm breathing less and less!” (見事な歌詞) と歌い、今晚彼女に求婚するかもとシボに打ち明ける。

ジョージとシボの場面に対応する女同志の会話で、クリスマス商品の包装をしながら同僚の若い女性イローナ (Ilona) に文通相手の名前は？ハンサム？と聞かれ、アマリア (Laura Benanti) は答えられない。アマリアは恋人の名前や外見よりも、もっと重要な彼の内面を知っていると言う。彼の高邁な精神を崇拜し、繊細な心に共感し、“We're one in mind and heart” と言う。外見やセックスも重要よと言うイローナ (Jane Krakowski) だが、ついに、たぶん私ももっと教養を高めたほうがいいわねと意見を変える。ほとんど動きもない場面で、旋律も地味な歌 (レチタ) や何気ない会話だが、歌が台詞を深め、たまには歌が台詞を裏切って人物の心の内や性格を伝える。最後に彼がハンサムでなくても大して問題じゃない。心と比べれば「名前なんて重要じゃない」と歌う二人の感情の高まりを表わす音楽と歌がすばらしい (What's in Name)^[4]。

イローナは原作では端役の若い女店員だった。ミュージカルとなって、主役ヒロインの親友役となり対照的な性格を与えられている。恋を夢みる歌うヒロインに対し、イローナは典型的脇役の世慣れたコミックな金髪美女で、色っぽいダンスを披露する。同僚で愛人の放蕩者コダーイ (Kodaly) に「今夜一緒に出掛けよう」(Come with Me, Ilona) と情熱的なダンスに誘われる (コダーイを演じるのは Gavin Creel で Broadway のダンスの名手)。伊達男そのまま気取って口説く彼のダンスの魔力にかかり、イローナは妖艶な真紅のドレスを翻し、見事な開脚と長いスリットの入ったスカートで性的魅力満載に粋なルンバを披露する。これはこのミュージカル1番の魅惑的な場面で目を奪う。もっ

とも、アマリアの恋に影響されたイローナはこのダンスの合間にも、彼の誘惑に反発を投げかける。

1幕の終盤、初デートの名場面では、コメディと哀感が混じり合う二人の会話と歌が良い。アマリアが歌う“Dear Friend”の“a violin starts to play / Candles and wine, tables for two, but where are you dear friend?”は、レハールのオペレッタ風でうっとりさせる。カフェを覗き見したシボに、文通相手がアマリアと教えられたジョージは目印の花を隠し、バラを挟んだ約束の本を側に置く彼女に近づく^[6]。急に親密になろうとするものの、相変わらず嫌味が出るジョージと彼女はまたも口喧嘩するしかない。この作品のエッセンスとも言える二人の心の行き違いは誤解の喜劇を楽しませるが、最後に文通相手を受する彼女が振られたと悲しむ時彼女に共感して感傷に浸らせる。

このミュージカルでは、原作の小さなカフェが名前も豪華にカフェ・インペリアルと変わり、Rockwellの装置は、贅沢な赤いベルベットカーテンの揺れるカップル用ブースが並ぶ洒落た高級レストランになる。この店の給仕長が店の“Romantic Atmosphere”を自慢する傍らで、恋人用ブースで何度もキスが交わされる。その間に間抜けな給仕が何度も皿を割っては雰囲気壊すので、給仕長と給仕とのコミックな争いがダンスになる。これが発展して給仕達がバレエを踊り、ついにはカフェの客全員が舞台裏から響くタンゴの旋律に合わせ歌い踊る。舞台唯一の群舞は華やかで劇場を沸かせる。

主題歌“She Love Me”は、Zachary Leviの曲芸的な動きで見せ場となっている。アマリアが間違いなく自分の恋した文通相手で、彼女が文通相手(彼)を愛していると知ったジョージは有頂天になる。アクション俳優の経歴を活かし、舞台を盛大に踊り回り、跳ねまわって、側転までして愛を歌う^[6]。Leviは観客から大喝采をうけるが、歌は不十分である。歌詞にあるジョージの驚きと愛の発見という心情の変化とロマンチックな愛が感じられない。Warren Carlyleの鮮やかな振付は、元々地味な作品を現代的で生き生きとして魅力的なショーにした。が、この場面のLeviは、Broadwayらしい派手なダンスに精一杯で、ジョージの繊細な心の動きを歌で表現できていない。

だがアマリアの歌は、ジョージの派手で単純な歌とは違い、喜劇と感傷がほどよく交じり合う。始めのWhere's My Shoe?という歌では、アマリアが喧嘩ごしで出勤しようとする。熱でフラフラするアマリアをジョージが抱きとめ、何とか寝かせようとするCarlyle振付によるコミックな動きは楽しい。ジョージが立ち去った後、文通相手にいつものように感傷的な手紙を書き始めるが、ついつい“Vanilla Ice Cream”を見舞いに持ってきてくれたジョージが意識に上る。恋人(手紙の相手)から気持ちが逸れてしまい、何度も手紙を書き損じる。嫌いだった人が好きになるという180度の転回、意識の流れに似た独白の歌の中で表現される。彼はDr. JekyllとMr. Hydeみたいに、昔の彼とは違うという歌詞は笑わせる。“Vanilla Ice Cream”の歌のコメディが、アマリアの自己覚醒を明らかにする^[6]。この歌は初演のBarbara Cook(1927生)の十八番で、コンサートで必ず歌い喝采を浴びた歌だというのが、60年代の彼女のコロラトゥーラを響かせる素晴らしい歌に感嘆した[youtube]。The Sound of Music再演(1998)のマリアを代役で歌ってデビューし、2018年のMy Fair LadyでElizaを歌ったLaura Benantiもこの魅力的な歌で観客を喜ばせる。

作詞者Harnickが、本作はアンサンブル・ミュージカルだと言うだけあって^[7]、この店の店員と

社長の7人のアンサンブルが魅力的である。全員で繰り返し客に歌う“Thank you, madam. Please come again”の歌だけでなく、あらゆる局面でアンサンブルが演劇の魅力をもつ。なかでも、店の配達少年アーパド (Ahpap) が、店員に昇格させてと頼む歌“Try Me”は、社長を自殺から救った賢い彼と愛情深い父のような社長とのコメディが楽しい。Carlyle 振付らしい飛び回る動きも、頭の回転の速い元気なアーパドにはぴったりだ。最後に、社長マラチェック (Zoltan Maraczek) を演ずる Byron Jennings が重要である。社長は愛する妻の心が自分から離れ若い男と不倫していると知る。それでも夜までに金を欲しいと電話で言われ、去って行く妻にあくまで優しく“my love”と承知する。紳士的な社長と失われた愛への哀惜が、「過ぎし昔は若かった」(Young, Strong in days gone by)」と懐古的なワルツで歌われ、社長は店員達と優雅にワルツを踊る。しかし1934年という背景は、この美しい世界が無くなる寸前なのだ。上品な初老の紳士の結婚の破綻と、ナチ侵略(1939)による歴史あるハンガリーの破壊が重ね合わされる。原作者や映画のルビッチに共通の国籍離脱の悲哀を思いださせる (Bock & Harnick もユダヤ系)。さらに、今また人種差別や弱者を排斥する現実を思い、再演の今、社会の現状に対し改革を訴えてきたミュージカルの役割を再認識する。

この社長の悲哀も、コメディゆえに幸福な雰囲気ですべてを迎える。イギリス民謡“Twelve Days of Christmas”を用いたクリスマス・セール替え歌“Twelve Days to Christmas”(Harnick 歌詞)を、バルコニーから聖歌隊が歌う。クリスマスまでの12日間のうちに、ジョージとアマリアは日毎に愛を深め、ついにクリスマスにはジョージがアマリアの家の晩餐に招ばれる。クリスマス・イブに、社長がクリスマスを祝おうとシャンパン持参で店へやってくる。社長と社員皆がシャンパンでクリスマスに乾杯。そして年若いアーパドが社長に招かれ、レストランで豪華な晩餐を祝うことになる。孤独な社長がクリスマスに若い友を得たのだ。皆の幸福なクリスマスを祝って舞台は幕を閉じる。この舞台は、美しい装置は言うに及ばず、衣装、振付、照明と各分野がそれぞれ見ごたえあった。が、演出は原作を舞台化しただけと見え斬新とは言いがたい。とはいえ、心を高揚させる Bock の音楽と日常的でいて、心の機微を映す Harnick の歌詞のお陰でキャストは好演し、それぞれ魅力的な個性を演じた。あらためて作品の質の高さを感じさせられた。

この後、Broadway Cinema は 42nd Street を Royal Theatre of Drury Lane の公演録画で、さらに2018年8月公演の *The King and I* (Kelli O'Hara と渡辺謙主演) を London Palladium での収録で、映画館上映を行った。Broadway Cinema と言いながら、共に West End の劇場の公演録画であったが、ロンドンの歴史を感じさせる劇場での名公演を見ることができた。

最後に、松竹に Broadway Cinema のプログラムの販売を要望したい。National Theatre Live (in Japan) で販売される小型の簡便な program か、せめて MET ライブで配布されるようなメモが欲しい。

註

[1] 2016年春夏の舞台 *She Loves Me* のヒットを機に、Broadway HD が最初から世界中での放映を目指した録画を企画した。そこで Roundabout 劇団の50周年記念公演 (2016年7/1~7/10) の一環 *She Loves Me*

の7/1夜8時からのStudio 54での公演をBroadway HDが収録し、米TVで同夜同時にライブ放映した。この収録映像がこの後全米でまた世界中で映画館上映された。Broadwayのライブ公演がこのように世界中に放映上映されるのは、この作品が史上初である。名古屋での上映期間は2019年5/23(金)~5/30(木)。上映時間18:30~20:50。5/29観劇当夜の観客は16~7人に過ぎなかったが、最終30日夜には若いカップルなどが多く、ほぼ満席だったとのこと。そこで評判作にはMETライブビューイングのように昼間と夜間の2興行があればと思う。『王様と私』は赤池プライムツリーでも1週間昼間に上映があり良かった。もっと宣伝すれば、METライブの観客数ぐらいは動員できるのでは。

- [2] 主人公 Georg は Broadway では英語音ジョージと発音されていた。
- [3] Noel Coward の1936年 London 初演の *Tonight at 8.30* (comedy 中心の連作劇) を連想させる題名。そして主役2人は Coward の喜劇 *Private Lives* の主役達に似る。
- [4] もちろん、*Romeo and Juliet* での Juliet の台詞を思わせる。
- [5] *You've Got Mail* では、二人が Café で会うための目印に選ぶ本が *Pride and Prejudice* である。*She Loves Me* では *Anna Karenina* だが、*Pride and Prejudice* のほうが、始め敵対した恋人に合っている。
- [6] ジョージのショウは、『空騒ぎ』のとりわけ、Kenneth Branagh が演じた Benedict が、庭園で大喜びする場面を思い起させる (*Much Ado about Nothing*, 1993)。この時の Branagh のイタリア男らしい道化ぶりはぴったりだった。
- [7] 2016年冬のロンドン公演 *She Loves Me* 開幕前の press night (12/7) に観劇した作詞の Harnick が、この作品は「アンサンブル・ミュージカル」だと言った。2016年春夏の Broadway の大成功を受け開幕した公演はイギリス制作である (at Menier Chocolate Factory)。Top Hat の演出家 Matthew White の演出、Rebecca Howell の振付等イギリス人スタッフで、イギリスで人気のミュージカル俳優 (Scarlett Strallen, Mark Umbers, Katherine Kingsley [Ilona], Les Dennis [社長]) が、イギリス英語を使って演じ、欧州の雰囲気を出した舞台と評判になった。Harnick もこれまでで最高の公演だったと語り、一般観客にも12/25 開幕でまさに Christmas に相応しい Noel Coward 風の楽しい喜劇と喜ばれた。

(玉崎 記)

・ 2019 年夏 ロンドン (&ストラットフォード・アボン・エイボン) 演劇事情

今年の夏も、短期間ではあったが、イギリスへ出かけた。8月5日から20日までロンドンに滞在し、その間一泊でストラットフォード・アボン・エイボンを訪れた。滞在中に Shakespeare の作品を中心に以下9つの公演を観ることができた。

- 8月6日 *Fiddler on the Roof* Playhouse Theatre
9日 *Romeo and Juliet* Saddler's Wells
10日 *A Midsummer Night's Dream* Shakespeare's Globe Theatre
12日 *As You Like It* Shakespeare's Globe Theatre
13日 *Twelfth Night* Shakespeare's Globe Theatre
15日 *The Taming of the Shrew* Shakespeare Theatre
(Royal Shakespeare Company, Stratford-upon-Avon)
15日 *Measure for Measure* Shakespeare Theatre (RSC, Stratford-upon-Avon)
17日 *A Midsummer Night's Dream* Bridge Theatre
17日 *Peter Gynt* National Theatre

最初に Playhouse Theatre のミュージカル *Fiddler on the Roof* を観た。この作品は日本での上演や映画では観たことがあるが、ロンドンでの上演を観るのは今回が初めてである。テムズ川の南岸 Southwark に、チョコレート工場を改造してできた劇場がある。その名も Menier Chocolate Factory という。座席数 180 の小さな劇場である。この劇場で *Fiddler on the Roof* が 2018 年 11 月 23 日から 2019 年 3 月 9 日まで上演されて大成功を収め、この夏ウエスト・エンドで再演されることになった。1964 年アメリカ初演だから 55 年前のミュージカルなのだが、世界の各地で移民問題がクローズアップされる今、帝政ロシア時代のシュテットルで抑圧されたユダヤ人を描いたこの作品は少しも古さを感じさせない。成功は Trevor Nunn の演出に負うところが大きいと思う。ユダヤ人が置かれた状況を反映してか全体的に暗い舞台の上で劇が展開する。暗いと言えば、登場人物全員が黒い服を身に纏っていた。舞台に幕はなく、劇が始まる前から 20 人ほどの村人たち（ユダヤ人）が所在無げに舞台中央の広場に佇む。狭い舞台を囲んで幾重にも折り重なるように家並が続く、住人達を圧迫する。その圧迫感を払いのけるかのように、30 人近くの村人たちが乱舞した時、そのエネルギーには圧倒された。伝統を守ろうとする親の世代と時代の変化を受け入れようとする若者世代との対比が鋭く描かれる。時代に翻弄されるユダヤ人の悲しみと、新しい未来へ立ち向かうユダヤ人の覚悟とがひしひしと伝わってくる。落ちるかもしれない不安定な恰好のまま屋根の上でバイオリンを弾くバイオリン弾きに比せられる父親 Tevye を Andy Nyman が熱演していた。

Saddler's Wells Theatre といえば、普段はミュージカルやバレエが上演され、ストレート・プレ

イが上演されることはないことは知っていたが、*Romeo and Juliet* が上演されると聞いて、ほとんど何の情報も得ないまま、切符を入手した。やはり予想とは違っていた。The New Adventures Company によるこの公演は、演出の Matthew Bourne が Shakespeare の *Romeo and Juliet* を大幅に書き換え、Prokofiev の音楽を用いたモダン・ダンスであった。演出の Bourne はミュージカル *Oliver* や *Mary Poppins* の振付を担当したり、*Nutcracker*, *Swan Lake*, *The Red Shoes* などのバレエにも独自の解釈を加えた演出をしていて、イギリス人の間でも広く知られた演出家、振付師である。ダンスなので台詞は全く語られず、すべてが踊りによって表現される。まさに 'Play without words'、公演の flyer にある言葉を使えば、're-imagining of Shakespeare' であった。Verona Institute という精神科の病院と若者の更生施設を兼ねた場所に Romeo が両親に伴われてやってくる。国会議員である父親の強圧的な支配のもと、Romeo は精神的に不安定な状況にあり、この施設で治療を受けることになる。既に多くの若者たちが入院・入所していて、その中に Juliet がいる。Juliet はどうやら何か犯罪を犯したようだ。彼女は看守の Tybalt に目をつけられて施設内で追い回されている。ある晩、酒に酔った Tybalt がピストルを手に暴れまわると、Juliet は他の入院患者と協力して Tybalt を扼殺してしまう。その罪を Romeo が一人で負う。Romeo と Juliet はこの施設で若者たちの世話をしている牧師 Laurence の協力で結ばれる。その後 Juliet は Tybalt の亡霊に付きまとい、見誤って Romeo をナイフで殺害してしまう。嘆き悲しむ Juliet は自ら胸にナイフを立て自害する。ここには、二つの家の対立と運命とに翻弄される若い二人が描かれた Shakespeare 劇は全くと言っていいほどなくなってしまっている。これは Shakespeare ではないという思いは観劇中続いていたが、Prokofiev の音楽に乗ってエネルギッシュに踊るダンサーの動きに圧倒されて楽しんでいると、これも Shakespeare を現代に蘇らせる一つの方法なのではないかという思いが頭をかすめていた。この公演で 97 人の若いダンサーがデビューしたという。そのうち 81 人がイギリス人で、若いイギリス人ダンサーにとって Bourne の公演に出演することがダンサーとしての登竜門になっているのではないかとさえ思えた。この日の公演では、Mercutio 役のダンサーが舞台上で滑って大怪我をし、すぐさま代役に代わるはずだったが、折しも地下鉄の電力発電所の事故で、地下鉄が動かず、代役のダンサーが劇場に到着するまで、1 時間近く公演が中断されるという初めて体験するハプニングがあった。

Shakespeare's Globe Theatre では *A Midsummer Night's Dream*, *As You like It*, *Twelfth Night* の上演を観ることができた。今年の夏シーズンは、この 3 作品のほかに、*The Merry Wives of Windsor*, *Henry IV Part I & II*, *Henry V*, *Pericles*, *The Comedy of Errors*、さらには Ben Jonson の *Bartholomew Fair* が上演されていた。観ることのできた 3 作品の内 *As You Like It* は昨夏観た公演と同じ演出であった。1 年前の夏シーズンに公演した作品を同一演出で 1 年後の夏シーズンに再演したことは今までなかったと思い、異なる演出による公演と思い込んで切符を入手してしまった。この夏再演するほど昨夏での評価が高かったのだろうか。昨年 4 月にこの劇場の芸術監督に就任した Michell Terry が、この劇場で上演するすべての劇で、男優と女優をフィフティ・フィ

フティの割合で起用するという方針を採用することにしたことは、昨年の論考（「2018年夏 ロンドン&ストラットフォード・アポン・エイボン 演劇事情」『文化科学研究』Vol. 30）で明らかにしておいたが、果たして今年はどうなったか。

Sean Holmes 演出の *A Midsummer Night's Dream* は 11 人の俳優で上演されたが、11 人中 7 人が黒人俳優で、今や黒人俳優なしではロンドンの演劇が成り立たないことを感じさせた。Terry の方針に則って、男優が 5 人、女優が 6 人。主筋の主だった登場人物である Theseus / Oberon、Lysander、Demetrius は男優によって、Hippolyta / Titania、Hermia、Helena は女優によって演じられるが、脇筋の登場人物たちは Bottom をはじめ殆どが女優によって演じられる。女優によって演じられる Bottom を観るのは初めての経験であったが、なぜ女優が演じなければならないのか、最後まで違和感が残った。Puck は一人の役者が演じるのではなく、数人の役者が交代しながら演じていた。劇の最後に Puck が語る「エピローグ」は、11 人の役者全員が Puck になり、台詞を次々に語り継いでいた。これも今まで観たことのない演出であった。観客を劇世界に参加させる演出はこの劇場の特徴の一つであるが、この公演でもそれが見られた。開幕前に客席の中から 3 人の子供が舞台上げられて、天井からロープでぶら下げられた人形を、ロープからはずれ落ちるまで、何度も何度もバットで打たされた。それを観ていた観客たちは大声ではやし立てたが、何を表現しようとしたのか理解できなかった。音楽を担当する 5 人のミュージシャンが 2 階舞台から張り出し舞台に降りてきて、ほとんどの観客が知っていると思われるポピュラーソングを演奏し、観客に合唱させる場面もあった。村人たちが演じる劇中劇では、「月」の役を演じることになっている Starveling は登場せず、客席の中から男性一人に舞台上がってもらい、舞台後方に置かれた自転車のペダルを漕いでもらう。必死になってペダルを漕ぐと発電装置が動いて、明かりが点灯し、それで「月」を表現した。Starveling が語るはずの台詞は、台詞が書かれたメモを渡されて、その男性が語っていた。そこまでやらずとも、この劇場の構造からして、客席にいても観客は作品に容易に巻き込まれるはずである。何とも過剰な演出だと感じた。

昨年と同じ演出家、Federay Holmes と Elle White による *As You Like It* はほぼ昨年と同じ演出であった。昨年の公演に先立って Michell Terry が語っていた通り、この公演は 'gender blind' で、Rosalind を長身の男優、Orlando を小柄な女優が演じ、Celia の父親 Duke Frederick もレスラー Charles も Jaques も Phoebe も女優が演じた。Celia は女優によって演じられたが、その女優が聾啞の役者で、手話 (BSL) を使って演技していたのも昨年と同じである。男役を女優が演じ、女役を男優が演じることで、何か新しいことが生まれたと感じるよりは違和感が先に立ったのも昨年と同じであった。手話による演技も、相変わらず取り入れられていて、手話が分からなければ、手話だけで台詞を語る Celia の本意が観客に伝わらない。今年は手話による演技が昨年より増えていて、Jaques が最終幕で退場する際の大事な台詞も手話で語られていた。イギリスの劇場では上演中に手話通訳者が舞台の端に立って劇全体の台詞を同時通訳することがある。これは観客の中にいる耳の不自由な人

たちのためのものであって、役者が手話を使うのとは事情が異なる。この演出がさらに続くなら、この劇場へ来る観客は手話を理解できなければならないことになるのではないか。

Shakespeare's Globe Theatre で見た 3 つ目の公演は Brendan O'Hea 演出の *Twelfth Night* である。この公演はロンドン以外の地方公演や海外巡演のためのもので、Shakespeare's Globe's Touring Ensemble 8 名の役者によって上演された。地方や海外への移動も考えて舞台装置は全く使わない。こじんまりとした公演であった。役者 8 人の内訳は男優 4 人、女優 4 人である。Viola、Olivia、Sir Toby、Malvolio を男優が、Orsino、Maria、Sir Andrew Aguecheek、Feste を女優が演じる。その他の登場人物はこの 8 人が兼ねて演じる。ここでもまた Terry の方針が貫かれているが、女役の Viola を背の低い男優が演じ、この男優は男役の Cesario に変装する。この Cesario に長身の男優演じる女役の Olivia が恋をする。男役の Cesario に女役の Olivia が恋をするので、‘性’の観点からすると何の問題もなさそうだが、この二人が外観的に何ともちぐはぐで、しかも観客はこの二人が実は男優によって演じられていることを知っている。男役の Cesario に変装した女役の Viola が密かに愛しているのは女優が演じる男役の Orsino。女役の Viola が男役の Orsino を愛するのは、‘性’の観点からすると何の問題もなさそうだが、観客は Orsino が女優によって演じられていることを知っている。女優に男役を、男優に女役を演じさせるときに起きるこの混乱ぶりを演出家は観客に楽しませようとしているように思える。同様の混乱は、*As You Like It* で男優が演じる女役 Rosalind が男役である Ganymede に変装して、女優が演じる男役 Orlando に Rosalind に対する愛を語らせるときにも起きる。いずれの場合も、女優が男役を、男優が女役を演じなければ、この混乱は起きない。歌舞伎の女形の場合、男優は女役になりきり、時には女性よりも女性らしく演じるので、男優が演じていることを感じさせることはない。能の場合も、女役を男優が演じるとき、能面や衣装によって女役であることを示し、観客はその女役が男優によって演じられていることは意識しない。女性が舞台上がることを許されていなかった Shakespeare の時代にも、女役は変声期前の少年俳優が演じていた。おそらく少年俳優は男優とは考えられていなかったのではないか。変声期を過ぎると少年俳優は女役を演じられなかったという。変声期を過ぎると、女役を演じていても男であることを観客が感じてしまうからであろう。少年役者にとっては女に見えることが非常に大事であったのだ。一方、この 2 作品の演出では、男優が女役に扮しても男優であることが明らかだし、女優が男役に扮しても女優であることを隠さない。そこに混乱ぶりの原因があると思われる。この混乱が、ただ面白いだけのものなのか、それとも Shakespeare の演劇に何らかの新しさをもたらすものなのか。後者であるように思えてならない。

Shakespeare's Globe Theatre の運営には切符係や場内案内係や友の会受付係などなど多くのボランティアがかかわっている。その人たちの援助無くしてはこの劇場は成り立たない。ボランティアとしてこの劇場の運営に参加しているイギリス人の友人の話によると、Michell Terry が芸術監督に就任してから、ボランティアの数が減っているという。Terry の路線に賛同できずに辞めていくのだという。就任して 2 年、Terry がこのまま同じ路線を続けていくとは思えない。何らかの変化がもたら

される予感がする。

今シーズン、Stratford-upon-Avon では Shakespeare の *As You Like It*、*The Taming of the Shrew*、*Measure for Measure*、その他 John Kani の *Kunene and the King*、John Vanbrugh の *The Provoked Wife*、Thomas Otway の *Venice Preserved* が上演されていたが、そのうち Shakespeare の 2 公演を観ることができた。

今夏イギリスで見た公演の内、非常に興味深いと感じた公演が二つある。一つはここ Stratford-upon-Avon で観た RSC の *The Taming of the Shrew* である。演出は Justin Audibert。Audibert は、主として若い世代の観客のために活動を展開しているロンドンの Unicorn Theatre の芸術監督を昨年から務めているが、2015 年には RSC で Marlowe の *The Jew of Malta* を演出した経験がある。この *The Taming of the Shrew* では、彼は時代を 16 世紀に設定し、しかも、原作の時代背景を無視して、当時は女性が支配する母権性社会であったという前提で劇を始める。父権制社会の中で女性がどう扱われ、「じゃじゃ馬」と呼ばれる女性が男性によってどのように「馴らされる」かではなく、母権性社会の中で男性がどう扱われ、「じゃじゃ馬」と呼ばれる男性が女性によってどのように「馴らされる」かを提示しようというわけである。主だった登場人物の「性」が変えられる。原作とは違って舞台には女役が溢れる。Lady Baptista の二人息子 Katherine と Bianco 以外はほぼ女性である。原作の Verona の紳士 Petruccio に代わって女領主 Petruchia が「じゃじゃ馬 (ボーイ)」Katherine を馴らすための大騒動を展開し、Lady Vincentia の娘 Lucentia、Petruchia の女友達 Hortensia、それに老女 Gremia の 3 人が、Bianco の求婚者として、競い合う。Lucentia の二人の下僕 Trania と Biondella も女性に変えられる。全部で 10 人の女優が起用されているが、Petruchia を演じた Claire Price の潑刺とした演技が印象的であった。登場人物の「性」を変えたことに伴う台詞の変更も行われる。このような大胆な試みによって、Shakespeare の原作に描かれた父権制社会が痛快なほどに批判される。狙いのはっきりしない Shakespeare's Globe の Terry の試みよりもずっと革新的であると思う。今回の演出では Sly が登場する序幕がすべてカットされている。原作では、この序幕の存在によって、「じゃじゃ馬馴らし」の物語が Sly の見た夢の中で劇中劇として展開され、ここで描かれる男性による女性の支配は男性の願望を充足させるはかない夢に過ぎないことになる。この演出では、Sly の夢に代わって、母権制社会が指定され、劇の冒頭では、母権制社会を考ぐかのように打ち上げられる花火の音が鳴り響く。「じゃじゃ馬 (ボーイ) 馴らし」の物語によって、社会の中で男性を支配するという女性の願望が充足される。この劇で常に問題とされるのは、劇の最後に Katherine が語る台詞の真意である。従来演出では、女の従順を論ず Katherine の台詞をアイロニーとして語らせ、そこに女性の転覆的な勝利を見ようとすることが多い。そのような演出をしなければ、今日、この劇を上演する意味はないと考えるからであろう。一方、今回の演出の Katherine の語る台詞では、女性による男性支配が容認され、男性の側からのアイロニーを一切感じさせない。翻って考えてみれば、男性と女性を交換したこの演出は革新的で刺激的ではあることは確かだが、ただ男性優位社会と女性優位社会とをひっくり返して見ただけで、現代の「ジェンダー」が抱える問

題を解決する劇にするためには、さらなる革新が必要になるであろう。

マチネーで *The Taming of the Shrew* を観たあと、夜は RSC の芸術監督を務める Gregory Doran 演出の *Measure for Measure* を観た。Shakespeare 全作品の演出に意欲を燃やす Doran にとって 27 番目の作品である。聖なるものと俗なるものが共存していた 20 世紀初頭のウィーンこそこの作品の時代背景にふさわしいと Doran は考えたようだ。舞台後方は蜷川幸雄の舞台を思わせる鏡が張りめぐらされている。全体的に Film Noir のような暗い雰囲気支配している。マチネーの *The Taming of the Shrew* の明るい刺激的な舞台に興奮冷めやらぬ身からすると、いかにも暗い。*The Taming* で Petruchia を澁刺と演じていた Claire Price が原作では男役である Escalus を演じていたが、ここでは精彩がなかった。確かに正義をめぐる心理劇のような一面のあるこの劇を明るく演じることは難しいものの、Doran の演出への期待が大きかった分だけ、これまでの伝統を越えた新しい *Measure for Measure* を観ることができず、不満が残った。

ロンドンに戻って、今夏非常に興味深いと感じたもう一つの公演 *A Midsummer Night's Dream* を Bridge Theatre で観た。Bridge Theatre へはこれまで出かけたことはなかった。この劇場は National Theatre の芸術監督を辞した Nicholas Hytner が、同じく National Theatre の Executive Director を辞した Nick Starr と協力して、2017 年に、テムズ川の南、新しい市庁舎の隣、Tower Bridge を臨む地に、London Theatre Company の本拠地として、建てた劇場である。座席数 900 の劇場である。一階のストールの座席をとりはずして、その部分を土間として使ったり、ストール席の中に張出し舞台を設定したりして、劇場空間を上演作品に合わせて変化させることができる。ストール席を土間に変えたときは、土間を四方から囲んだ 2 階と 3 階の観客席から観劇することになる。昨年評判を呼んだ *Julius Caesar* では、土間に多くの立ち見の観客を入れ、舞台はシーンに合わせて、卓球台よりやや大きな台を組み合わせるその都度作り直す。観客の目の前で役者が演技し、観客を劇世界に直接参加させる。観客は役者の動きに合わせて土間を移動し、ローマ市民として劇に参加することになる。土間に舞台をつくることはなかったが、かつて RSC が Stratford-upon-Avon の The Other Place で、同じように、*Julius Caesar* を上演したことがあった。今回の *A Midsummer Night's Dream* でも、演出の Hytner は多くの立ち見客を土間に入れ、アテネ郊外の緑の森で展開される劇を、直接体験させる。この劇場でなければできない演劇体験である。土間には 3 か所せり上がりの装置があって、そのせり上がりを利用しながら、舞台係は、それぞれのシーンにふさわしい舞台を、芝生に覆われた台を組み合わせる作っていく。統制のとれた舞台係の素早い動きには目を瞠るものがあった。こうして出来上がった緑の世界で、Puck をはじめとして妖精の Peaseblossom、Cobweb、Mote、Mustardseed は天井から長く垂れ下がった白い布を身に絡ませて、アクロパティックな踊りを優雅に展開する。ふと、すでに 50 年も前のことになるが、妖精たちに天井からぶら下がったブランコに座らせ、皿回しをさせた、1970 年の Peter Brook 演出による *A Midsummer Night's Dream* の上演を思い出した。妖精たちの住む異界を表現するのに Hytner は Peter Brook を念頭に

置いていたに違いない。この劇場の柿落しで上演された *Young Marx* で Friedrich Engels を演じた Oliver Christ が Oberon / Theseus を、アメリカのテレビドラマで有名になった Gwendoline Christie が Titania / Hippolita を堂々と演じ、下手をするとドタバタ喜劇で終わってしまいそうなこの劇に、太い枠組みを与えている。現代の観客を意識した演出もいくつか見られた。Love-in-idleness から搾った花汁が、Titania ではなくて、Oberon の眼に塗られ、目を覚ました時、最初に目に入った Bottom に Oberon は恋をしてしまう。かくして二人は同性愛に落ちる。村人たちが劇の上演予定の日の夜に月が出るかどうか心配しているとき、村人の一人が観客から「スマホ」を借り、ネットで月齢を調べ、間違いなく月が出ることを確認した後、自撮りでその観客と写真を撮り、観客から拍手喝采を浴びる。三組の結婚が成立してハッピーエンドの終幕を迎えると、観客席に直径が2メートルもあるかと思われるほど大きなビニール製のボールが二つ、土間の観客の頭上に投げ入れられ、観客たちはボールが落ちないように次から次へと両手でとなりの人に手渡していく。この劇を観たあとの感激を次から次へと隣の人に手渡していくかのように。これまで *A Midsummer Night's Dream* の公演はいくつも観てきたが、心に残る公演となった。

今夏、イギリス最後の観劇は National Theatre、Jonathan Kent 演出の *Peter Gynt* である。1867年、Ibsen はノルウェーの神話、民話を取り入れて劇詩 *Peer Gynt* を書いた。Ibsen 自身はこの劇詩を上演することは考えていなかったようだが、David Hare は、この作品に依拠しながら、時代を20世紀に、場所をスコットランドに変えて、*Peter Gynt* を書き、上演した。上演時間3時間20分の大作である。この作品の宣伝パンフレットによれば、「イブセンの古典が21世紀の放埒な冒険譚として再生された。」National Theatre で上演された *Young Chekhov* 3部作や *Angels in America* での演技で高い評価をえた James McArdle が Peter を演じた。強いスコットランド訛りの英語で語りながら、開幕から終幕までほぼ常に舞台上にいて、Peter を熱演した。想像力が豊かで、いつも大言壮語を口にしては村人たちから嫌われていた Peter が、村を追われるようにして、自分探しの旅に出る。エジプトやアメリカに渡ったり、魔王の支配するトロールの王国で災難に会いながらも、武器を売って大金もちになったかと思うと、財産をすべて盗まれて一文無しになったりしながら、大冒険の末に、年老いて「死神」の来訪を受け、故郷に戻って、ついには自分を見つけることもできないままに、死の床に就く。物語の大筋は Ibsen に従いながら、Hare は現代の観客を引き込もうと、現代的な要素をあちこちにちりばめて新しい劇世界を作っていく。強運な Peter は飛行機 (Ibsen には飛行機は登場しない) が墜落しても死なない。金持ちになってゴルフ倶楽部や新聞社を買収したり、ちょっと目を離れたすきに、コンピューター上の資産情報を盗まれて、全財産を失ったりするエピソードが次々に演じられていく。その一方で、トロールの王国への訪問や「死神」の来訪など、Ibsen が用いた神話や民話の要素も温存されている。リアリスティックな要素と幻想的な要素がうまく融合していない印象を受けた。McArdle の熱演にも拘わらず、結局のところ、「いったい自分は何者なのか」という Peter が自問し続けたテーマは解決されないまま観客に引き継がれる。Peter が語った “People don't have lives anymore, they have stories ” (「もはや人に人生はない、あるのは物語だけだ」) が長い

こと耳から離れない。観終わって徒労感の残る上演であった。

今夏、London と Stratford-upon-Avon で見た上演から最も心に残ったのは、演出家や劇作家の「変革」への強い思いである。すべての演出は先行する演出の「変革」なのではあるが、今年は、演出家たちが特に「変革」を意識しているように感じた。Shakespeare の *Romeo and Juliet* を大幅に書き換えた Matthew Bourne のダンスも Shakespeare を大衆に受け入れてもらうため革新的な試みであったし、Shakespeare's Globe Theatre の Terry の演出方針も現代という社会に Shakespeare の作品を受け入れやすいものにするための「変革」であると考えられることもできる。RSC の *The Taming of the Shrew* も Bridge Theatre の *A Midsummer Night's Dream* もこれまでにない革新的な演出によって作品に新たな光を当て、観客に新たな視点を与えようとする試みであった。*Peter Gynt* も Ibsen の *Peer Gynt* に「変革」をもたらそうとした Hare の大胆な試みであった。来年はどのような「変革」が見られるか。今から楽しみだ。演劇は日々「変革」を遂げていく。

(酒井 記)